

読書指導についての一考察

指導主事 岸 本 憲 一 良

Kishimoto Ken'ichiro

要 旨

様々な方面からその重要性が叫ばれている読書指導。最近の子どもの読書傾向を探るとともに、読書指導に関する法律や施策、近年行われている様々な取組等について考察を加えた。

キーワード： 読書指導、学校図書館、朝の読書、読書へのアニメーション

1 はじめに

平成16年2月3日に出された文化審議会国語分科会の答申で、改めて読書指導の重要性が強調された。同年6月25日にこの答申の説明会があり、副分科会長の阿刀田高氏が「読書が減れば日本が減ぶ」という藤原正彦氏の言葉を取り上げて、読書の大切さを説いていた。

このように、半ば危機感をもって提唱される読書指導。最近の子どもの読書傾向や読書指導に関する法律や施策、近年行われている様々な読書指導の取組等について考察する。

2 研究目的

子どもの読書の傾向をとらえ、読書指導の重要性や読書指導についての施策、取組等について研究する。

3 研究方法

- (1) 子どもの読書傾向についての考察
- (2) 読書指導に関する施策についての考察（法整備等）
- (3) 読書指導に関する施策についての考察（審議会答申等）
- (4) 読書指導の取組についての考察

4 研究内容

- (1) 子どもの読書傾向
まず、現代の日本の子どもたちの読書傾向について考察する。
ア OECD加盟国生徒の学習到達度調査（2000年）より
資料として提示したのは、2000年のOECD加盟国生徒の学習到達度調査（PISA）である

(表1)。これによると、「趣味で読書することはない」と答えた生徒が半数を超え、いかに読書に親しんでいないかが分かる。同じく「どうしても読まなければならない時しか、本は読まない」と答えた生徒が21.5%で、1位である(OECD平均12.6%)。「家に1~10冊の本がある」が10.1%で1位(OECD平均8%)であることを考え併せると、「本は持っているが読まない」ということになる。ちなみに、「マンガを週に数回読む」と答えた生徒が58.8%にも上り、OECD平均の14.1%から考えると、群を抜いての1位である。

表1 「OECD生徒の学習到達度(PISA)2000年 調査国際結果報告書」より抜粋

国名	割合 (%)				
	趣味で読書することはない	毎日30分未満	毎日30分以上1時間未満	毎日1時間以上2時間未満	毎日2時間以上
日本	55.0	17.8	15.4	8.2	3.5
イギリス	29.1	35.7	22.9	9.4	2.9
フランス	30.0	27.5	28.6	10.6	3.4
アメリカ	40.7	31.2	16.2	8.1	3.9
韓国	30.6	29.6	21.9	12.0	6.0
フィンランド	22.4	29.1	26.3	18.2	4.1
アイルランド	33.4	30.9	20.4	11.6	3.8
オーストラリア	33.1	30.5	20.5	11.8	4.1
イタリア	30.7	30.2	22.5	13.0	3.7
カナダ	32.7	33.7	20.4	9.6	3.6
ドイツ	41.6	27.0	18.0	8.8	4.6
ニュージーランド	29.9	36.6	19.4	10.4	3.7
OECD平均	31.7	30.9	22.2	11.1	4.2

イ 「第50回読書調査」より

毎日新聞社と全国学校図書館協議会が毎年行っている「読書調査」の2004年の結果が出た。これによると、1か月(2004年5月)に1冊も本を読まなかった小学生が7.0%、中学生が18.8%、高校生が42.6%となっている。また、1か月の平均読書冊数は、小学生が7.7冊、中学生が3.3冊、高校生が1.8冊となっている。ここからは、上の学校に進むほど本を読まなくなるという実態が明らかになっている。特に1か月に1冊も本を読まなかった高校生は、半数近くになっている。

次に、この結果を3年前の同調査の結果と比較してみる(表2)。1か月に1冊も本を読まなかった児童生徒は、かなり減少している。小学生で3.5ポイントの減、中学生は24.9ポイント減で半数以下になっている。高校生も24.4ポイントと、大幅に減少している。1か月の平均読書冊数も、それぞれ1.5ポイント、1.2ポイント、0.7ポイントと、わずかではあるが伸びを示している。

これは、「朝の読書」をはじめとする様々な取組の成果といえるが、それでもまだ十分に本を読

んでいるとは言い難い。

表2 「第47回読書調査」と「第50回読書調査」の比較

1か月に1冊も本を読まなかった (%)				1か月の平均読書冊数 (冊)			
	小学生	中学生	高校生		小学生	中学生	高校生
第47回 2001年	10.5	43.7	67.0	2001年	6.2	2.1	1.1
第50回 2004年	7.0	18.8	42.6	2004年	7.7	3.3	1.8

(2) 読書指導に関する施策1＝法整備等

子どもの読書活動を推進するために、近年法整備等も進められている。

ア 「子どもの読書活動の推進に関する法律」

平成13年12月、「子どもの読書活動の推進に関する施策を総合的かつ計画的に推進し、もって子どもの健やかな成長に資する」ことを目的とし、「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定された。「基本理念」、「国の責務」、「地方公共団体の責務」、「保護者の役割」等を明文化し、11条からなっている。

イ 「子どもの読書活動に関する基本的な計画」

アの「子どもの読書活動の推進に関する法律」を受けたもので、平成14年8月に閣議決定された。「家庭、地域、学校を通じた、子どもが読書に親しむ機会」を提供することとし、その内容として、次のものを挙げている。

- (ア) 家庭教育に関する学習機会等を通じた、親に対する読書の重要性の理解の促進
- (イ) 図書館等でのお話し会などの活動や関係機関と連携した取組の充実
- (ウ) 「子どもゆめ基金」の助成による、民間団体の活動の支援
- (エ) 学校における学習活動を通じた読書活動の推進
- (オ) 学校における「朝の読書」の奨励や目標を設定すること等による読書習慣の確立

ウ 「奈良県子ども読書活動推進計画」

ア、イ等を受けて、奈良県でも平成15年7月に「奈良県子ども読書活動推進計画」を策定した。大きくは、以下の三点から構成されている。

- (ア) 子どもが読書に親しむための機会の提供
- (イ) 子どもの読書活動を進めるための環境の整備と充実
- (ウ) 子どもの読書活動についての啓発と推進体制の整備

(3) 読書指導に関する施策2＝審議会答申等

ア 中央教育審議会答申「新しい時代を拓く心を育てるために一次世代を育てる心を失う危機－」
(平成10年6月)

「子どもたちに読書をうながす工夫をしよう」と呼びかけ、「読書は、豊かな感性や情操、そして思いやりの心をはぐくむ上で大切な営みである」と述べている。読書量の減少や不読者の増加を憂え、「今後、家庭においても幼児期から読書を楽しむ体験を子どもに与えるとともに、学校に

においても読書をうながす工夫をしていくことが必要である」とし、次の五点を提案している（筆者要約）。

- (ア) 感動する本を用意し、子どもの読書ニーズの把握に努め、学校と公共図書館等との連携を図ること。
- (イ) 読書の楽しさとの出会いをつくること。
- (ウ) 教員は、読書を楽しむ子どもの心に共感し、読書で得た感動を子どもたちが表現する様々な方法を工夫していくこと。
- (エ) 学校図書館を、子どもたちがくつろぎ、進んで読書を楽しむために訪れる環境にすること。
- (オ) 学校の取組と家庭での働きかけの連携を図ること。

イ 中央教育審議会答申「新しい時代における教養教育の在り方について」（平成14年2月）

「国語教育や読書指導の重視」の項を起し、「朝の10分間読書」の推奨や図書館の総合的な機能の充実の必要性について述べている。

ウ 文化審議会国語分科会答申「これからの時代に求められる国語力について」（平成16年2月）

先に述べたように、ここでも読書指導の重要性について述べている。「国語力を身に付けるための読書活動の在り方」について、大きく以下の三つの観点から具体的な提案を行っている。

- (ア) 読書活動についての基本的な認識
 - (イ) 学校における読書活動推進の具体的な取組
 - (ウ) 家庭や社会における読書活動推進の具体的な取組
- (4) 読書指導の取組について

(1)、(2)、(3)で述べたことを念頭に置き、具体的実践に取り組んでいくことが必要である。以下、具体的な読書指導の取組について述べる。

ア 学校図書館の活用

学校図書館には、二つの側面がある。一つは「読書センター」としての学校図書館であり、もう一つは「学習・情報センター」としての学校図書館である。前者は「生きる力」の「豊かな人間性」を、後者は同じく「確かな学力」を反映している。他人を思いやる心や感動する心などを養う心のオアシスとして、また豊富な情報資料を活用し情報リテラシーを身に付ける場として、学校図書館の活用を工夫していかなければならない。

イ 朝の読書

今や、全国の学校に広がっている取組である。奈良県でも現在、8割を超える小学校でこの取組が行われている。

林公氏は朝の読書に関して、「四つの原則」を示した。①みんなで、②毎日、③好きな本を、④ただ読むだけ、がそれである。担任の先生を含めた「みんなで」読書し、10～15分でよいから「毎日」続けることが大切であるとした。そして、子どもに「好きな本を」選ばせ、「ただ読むだけ」で感想文等は何も要求しないこととした。これをそのまますべての学校に当てはめて実践することは難しいが、学校の実状や児童生徒の実態に合わせて取り組んでいく価値はある。「集中力」、あるいは「落ち着き」に結び付くとの意見も、多数寄せられているのである。

ウ 読書貯金

本を読んだ記録を書き残しておくものである。貯蓄を励みに、子どもが読書量を増やしていくようにという意図がある。「通帳」は簡単なものでよいが、読書の貯蓄量が分かるように工夫しておく必要がある。

エ 読書へのアニメーション

これは、スペインの新聞記者、M. M. サルト氏が考案したものである。「アニマ」はラテン語で生命、魂を意味し、「アニメーション」は人間がもって生まれたその生命と魂を生き生きと躍動させることを意味する。これには、遊びの形態をとる「作戦」が数多くある。子どもたちは、ゲーム感覚で読書の楽しさを体感していくことになる。ここでは、その「作戦」のうちの二つについて触れておく。

(ア) 「ダウトをさがせ」

教員が、同じ物語を2回読む。1回目は原文どおり正確に読み、2回目はいくつかの言葉をわざと間違えて読む。気が付いた子どもはその時点で「ダウト！」と言い、本当の言葉を伝えるのである。

(イ) 「前かな？後ろかな？」

学級の子どもたちが、同じ物語を読んでおく。あるいは、教員が初めに物語を読み聞かせる。段落の抜き書きやまとめをカードにし、バラバラにして子どもたちに持たせる。一人がカードを読み、次の子どもは読んだ子どもの段落の前か後ろを考える。それを次々と繰り返し、物語の段落の順序どおりに、子どもたちが並び替えていくというものである。学級の子どもの人数が多い場合は、グループに分けて行ってもよい。

オ パネルシアター

子どもたちに、ただ物語を読んで聞かせるだけでなく、パネルに登場人物や風景を提示しながら物語を進めていくものである。パネルシアターにはいろいろな種類があるが、ブラックライトを使ったパネルシアターは、幻想的で、子どもたちに感動を与える。部屋を真っ暗にし、蛍光塗料で色づけした登場人物等を、毛羽立ったパネルに貼り付けたり、はがしたり、動かしたり、裏返ししたりして進める。紙芝居やペープサートとは、また違った魅力を醸し出す取組である。

カ ブックトーク

ブックトークとは、あるテーマに沿って数冊の本を選び、それらを一連の流れの中で子どもたちに紹介していくものである。子どもたちが「読んでみたい。」という気持ちを抱くように、様々な工夫をすることが大切である。クイズを出す、一部（あるいは全部）を読んで聞かせる、あらすじを紹介する、バックミュージックを入れるなどの工夫をし、子どもたちと交流しながらトークを進めていくことが大切である。

キ 読書啓発、読書指導のための「たより」

各学校で工夫を凝らし、様々な「図書館だより」が発行されている。管見であるが、最も参考になる読書啓発、読書指導のための「たより」を発行しているのは、山形県鶴岡市立朝陽第一小学校である。朝陽第一小学校では、3種類の「たより」を発行している。一つは、図書委員会の

メンバーが中心になって編集した、児童向けの「としょかんだより」である。人気図書や推薦図書の紹介、子どもたちの読書感想などを掲載している。もう一つは、教員一人一人が全職員に向けて発行する「職員用図書館だより」である。教員が読書指導について研修したことを一枚の資料にまとめ、発行している。これを材料に、職員全体で研修会をもつのである。三つ目は、司書教諭が中心になって発行する、保護者向けの「大人の図書館だより」である。司書教諭のみが執筆するのではなく、ここでも教員一人一人が順番に登場し、感動した本の紹介や読み聞かせの思い出などを載せている。

5 研究結果と考察

以上、子どもの読書傾向を探るとともに、様々な施策や取組について探究してきた。

子どもの読書傾向について明らかになったことは、次のとおりである。

- 本に不自由はしていないが、自分から進んで読書するということは少ない。
- 上の学校に進むほど、不読者の数は増えている。高校生の半数近くは、1か月に1冊も本を読んでいない。
- 上の学校に進むほど1か月の平均読書冊数は減少している。高校生のそれは、小学生の四分の一程度である。

これに対し、読書指導に関する法律の制定や審議会の答申が相次いで行われ、教育現場においても子どもを読書にいきなう様々な取組がなされてきている。このことにより、通時的に見るとわずかずつではあるが不読者は減少し、1か月の平均読書冊数は増えつつある。取組については、これまでも行われてきた読み聞かせやお話し会に加えて、朝の読書、読書へのアニメーション、ブックトークなどが脚光を浴びるようになってきた。しかし、大切なのは、目新しさや流行ではなく、子どもたちにとってなぜ読書が必要なのかを我々大人がしっかりと認識し、望ましい子ども像について共通理解をもった上で指導に当たっていくことである。教員や学校だけの取組に終わらず、保護者や地域、自治体等をも巻き込んで実践していくことにも留意しておく必要がある。

参考・引用文献

- | | | | |
|---------------|-------------------------------|-----|------|
| (1) 拙稿 | 読書の習慣化をめざした取り組み（「小四教育技術10月号」） | 小学館 | 2004 |
| (2) 国立教育政策研究所 | 読書活動・学校図書館関係資料 | | 2004 |
| (3) 奈良県 | 奈良県子どもの読書活動推進計画 | | 2003 |
| (4) M. M. サルト | 読書へのアニメーション—75の作戦 | 柏書房 | 2001 |
| (5) 朝暘第一小学校 | こうすれば子どもが育つ学校が変わる | 国土社 | 2003 |